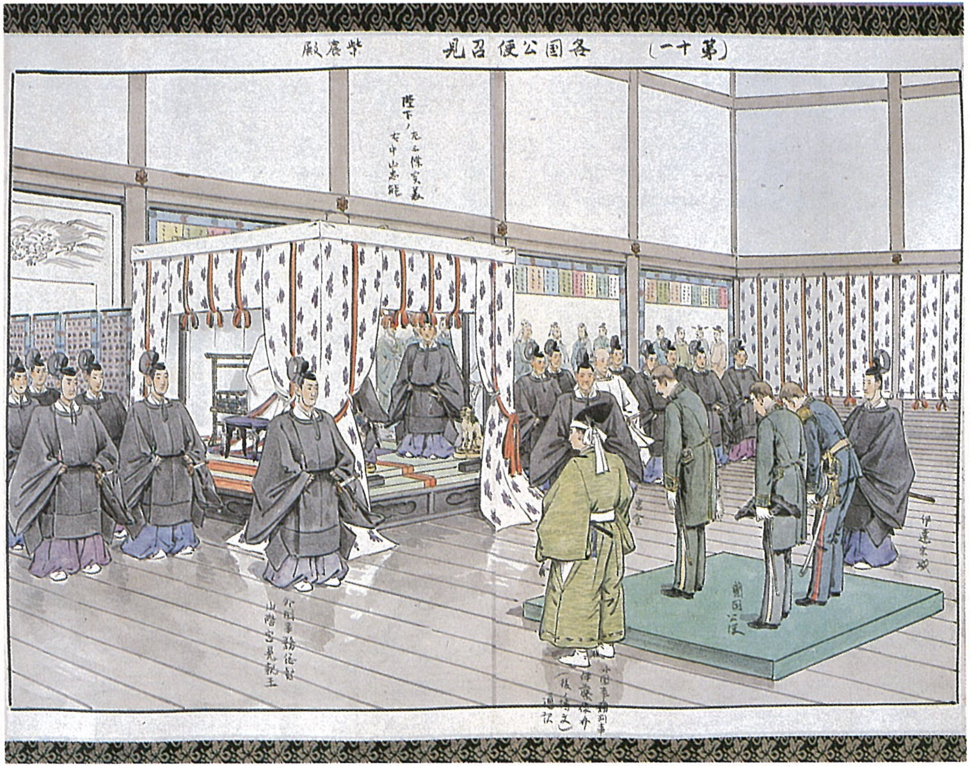
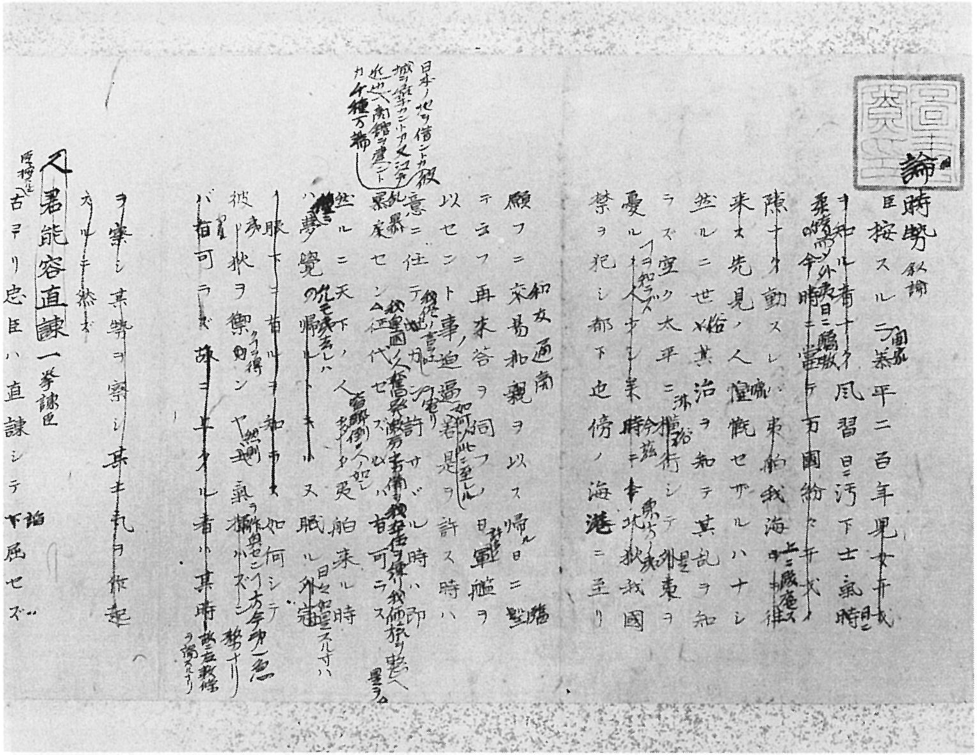
平成四年十一月十日〜十三日

〝近世近代の対外関係史料〟展示目録

宮内庁書陵部



宮内省編修　明治天皇紀附図　第一巻「第十一　各国公使召見」



時　勢　論

書陵部所蔵〃近世近代の対外関係史料〃

先年当部では〃古代中世の対外関係史料〃と題する展示会を行った。今回はそのあとを受けて、書陵部所蔵の記録・文書から近世近代の対外関係に関わる史料を選んで展示し、高覧に供することとした。

展示の内容は、(一)書物の輸入と海外知識の吸収、(二)初期の日蘭関係の一端を示す史料、(三)琉球・蝦夷地の状況を示す史料、(四)漂流記、(五)幕末の海防論・時勢論、(六)外国使節の応接に関する記録、(七)幕末・明治初期の開国・条約改正等に関する記録、などである。

今回の展示も前回と同じく、近世近代の対外関係史を通史として把握することのできるよう意図したものではなく、いくつかのテーマごとに自筆本、類例の少ない珍しい史料、またそれぞれのテーマにとって意義の深い写本等を展示した。必ずしも対外関係史の視点にこだわらず、個々の展示史料に即してご覧いただければ幸いである。

一　啓迪集　八冊　五五七—四五

戦国・安土桃山時代の医師曲直瀬道三（正盛、一五〇七—一五九四）の医書。『察証弁治啓迪集』ともいう。道三は京都の人。雖知苦斎と号し、のち正親町天皇より翠竹院の号を賜る。永正十一年（一五一四）僧となり、享禄元年（一五二八）足利学校に入り、経書などの学習につとめた。同四年明国留学の経験をもつ名医田代三喜と出会い、当時先端医学であった中国李朱医学（李東垣・朱丹渓の医学）を学んだ。天文十四年（一五四五）京都に帰り、僧籍を脱して医業に専念、精妙の医術をもって大いに名を顕し、また学舎啓迪院を創設して俊才の養成につとめた。

『啓迪集』は天正二年（一五七四）に完成し、同十一月に正親町天皇の御覧に供した。書名は医学の後進を教導啓発する書物の意味である。本書は系統的な治療書のないことを痛感した道三が、経験に基づき李朱医学の立場より、古今の医書六十四部からその論説と処方とを抜粋抄録したもの。全八巻を中風門以下七十四門に分かち、類似の疾病をまとめ、個々の疾病の条では、名証（名義）・由来（定義）・弁因（原因）・証（症候）・脈法（診断）・類証（類症鑑別）・予知（予後）・治方（治療）の八項目について記述している。展示本は天正七年三月、道三がその門人宜帆道救の永年の医業学習を賞し、自ら跋文を記して授けた本である。道三はしばしば医術を修めた門人に対して、『啓迪集』の写本に自ら跋文を記して授けており、展示本と同様な写本が内閣文庫などに伝わっている。なお杏雨書屋（武田科学振興財団）に道三の自筆稿本がある。

二　暦算全書　四六冊　四〇三—二七

『暦算全書』は清の梅文鼎（一六三三—一七二一）が西洋の算・暦・天文学の学説を取り入れ、雍正元年（一七二三）に刊行した暦算学の理論書。展示本は、原書を書写して返り点・送り仮名を施した写本である。原書が日本

に伝来したのは享保十一年（一七二六）である。時の将軍徳川吉宗は天文・暦学に関心が強く、当時不備が指摘されていた貞享暦を西洋暦学をもって正し、改暦することを考えており、享保五年に科学技術書等に関して一部禁書令を緩和したのを機に幕府は同十一年『暦算全書』を輸入し、ついで建部賢弘（かたひろ）（一六六四―一七三九）・中根元圭（げんけい）（一六六二―一七三三）の二人に、原書を書写して返り点・送り仮名を施すよう命じ、両名は同十八年正月にこれを完成し、幕府に献上した。展示本はその幕府献上本である。明治維新以後、本書は内閣文庫を経て、明治二十四年に宮内省に移管され、現在書陵部に保管されている。本書は、序文・法原・法数・暦学・算学という構成をとり、三角函数・三角法・幾何学等、様々な暦算学上の理論、日月蝕に関する計算や天球の構造等をはじめとする暦・天文学上の諸理論が、それぞれ表や図像を用いて記されている。

訳者の建部賢弘は関孝和に学び、数々の算学書を著しており、吉宗の信任も厚かった。中根元圭は賢弘の門人で、暦書『皇和通暦』などの著書で知られ、賢弘の推挙によって本書の訓訳に携わっている。

三　道蔵経　　四一一五帖　　四六〇―一

『道蔵経』は不老長寿・現世利益を求める中国の民間宗教をもとに成立した道教に関する経典を集成したもので、仏典の『大蔵経』に相当する。本来、道蔵とは道教の典籍を収納する経蔵のことで、そこに収集された経典が『道蔵経』といわれた。『道蔵経』の編纂は明の永楽年間（一四〇三―二四）の成祖の勅命に始まり、英宗の正統十年（一四四五）に五千三百五巻が完成した。これが正統道蔵であり、北京の白雲観を始め各地の道観（道教寺院）に下賜された。その後、神宗の万暦三十五年（一六〇七）に続道蔵経百八十巻を正統本に合わせたので、五千四百八十五巻となり、一般に『道蔵経』と呼べば、正統道蔵と続道蔵経の両者を指す。展示本は明の官版で、大部分は正統本であるが、一部万暦年間の再刻本も含まれている。帖中には「佐伯侯毛利高標字培松蔵書画之印」なる印があり、豊後国佐伯藩主毛利高標（たかすえ）（一七五五―一八〇一）の所蔵であったことが知られる。高標の蔵書は佐伯文庫と呼ばれ

たが、文政十年（一八二七）に第十代藩主の高翰がそのうちの二万冊余りを江戸幕府に献上し、その中に本書が含まれていた。その後、内閣文庫を経て、明治二十四年に宮内省図書寮の所蔵となった。本書は千三百七十巻分を欠いているが、一九二三年から二六年にかけて上海の涵芬楼が白雲観所蔵本を底本に影印した上海版の『道蔵経』が千百巻にすぎないことからすれば、書陵部本は道教の研究において大変貴重である。なお、当部では昭和二十九年に欠失部分のうちの二十四帖を購入している。

四　大越史記全書　　一五冊　　五〇一—五一〇

『大越史記全書』は二十四巻から成る漢文編年体のベトナムの史書で、その構成は、序・「本紀全書」九巻・「本紀実録」六巻・「本紀続編」四巻・「外紀全書」五巻である。展示本は十五冊の安南版で、表紙は安南版の特徴である黒ずんだ褐色の染料が施されている。装丁は紙釘装。内題には「大越史記全書国子監蔵板」とある。「緋衣」なる蔵書印があるが、伝来の経緯は不明である。

『大越史記全書』の編纂は以下の様な複雑な経緯を辿っている。まず黎朝（一四二八—一五二七）の呉士連が、『大越史記』（黎文休編、一二七二年完成）と『大越史記続編』（潘孚先編、一四四五年完成）をもとに、編目を新たにして書き改め（洪徳十年〈一四七九〉の序あり）、『大越史記全書』と題して聖宗に進上した。それは建国伝記から黎朝成立（一四二八）までを内容としていた。その後、神宗までの黎朝の歴史と、玄宗・嘉宗の時代（一六六二—七五）が加えられ、正和十八年（一六九七）に『大越史記全書』二十四巻が板刻された。以後しばしば板刻・覆刻され、日本でも明治十八年に引田利章によって活字印刷されているほか、ベトナム語版（一九六七・六八年）や陳荊和氏校合の東京大学東洋文化研究所版（一九八四—八六年）もある。展示本は避諱の欠画や摺りの状態から、明命九年（一八二八）頃の覆刻本の後摺本と推定される。この後摺本は時代幅が大きいが、嗣徳年間（一八四

八―八三）に成立したと考えられている。当部所蔵本中唯一の安南版として貴重である。

五　帝鑑図説　二帖　五〇〇―六四

中国の君王の勧戒とすべき治績を図説した書。明の張居正・呂調陽が撰し、隆慶六年（一五七二）神宗に上呈した。古代の聖王堯・舜より宋の徽宗に至るまで、善として法となすべき八十一事、悪として戒めとなすべき三十六事を選び、各々四字の成語となし、それを図に描き、史書によって伝を録し、解説を加える。八十一という数字は九×九で陽数（奇数）に従い、三十六は六×六で陰数（偶数）に従ったもの。展示本は明の万暦元年（一五七三）官版で、きわめて珍しいものである。もと江戸幕府の文庫に納められていたが、明治維新後、内閣文庫を経て明治二十四年宮内省に移管され、今日に至った。縦五〇・五センチ、横四一・五センチの大型本であり、表紙に「御覧帝鑑図説上(下)巻」と貼外題する。現在二帖から成るが、善事の後半「納箴賜帛」から「燭送詞臣」までの四十二条を欠いている。『帝鑑図説』は早くに日本に伝わり、豊臣秀頼はこれを愛読して、慶長十一年（一六〇六）翻刻せしめた。その慶長版は初期の絵入木活字本として、わが国印刷史上に価値の高いものである。江戸時代にはその後も和訳本を含めて何度か出版されている。また絵画の方面でも影響があり、勧戒図の好画題として狩野派によって取り上げられ、江戸城を始めとする城郭や内裏などには本書を元とした障壁画が多く描かれた。

六　モンタヌス日本誌　一冊

本書はモンタヌス（一六二五？―一六八三）が一六六九年にオランダで出版した "**Gedenkwaerdige Gesantschappen der Oost-Indische Maetschappy in't Vereenigde Nederland, aen de Kaisaren van Japan**"（オランダ連合東インド会社日本帝国遣使紀行）の英訳版（"Atlas japannensis"）。一六七〇年ロンドンで刊行された。全体

は二部構成で、前半は豊臣政権の崩壊前後までの歴史的経過と宣教師の活動を、後半は徳川政権初期に来日したオランダ使節の日本との交渉を中心に述べているが、全体的に形式にとらわれず日本の政治・歴史・風俗・習慣・文化など多方面にわたって幅広く論じている。著者はライデンで神学と哲学を学び、終生オランダ南部スホンホーフェンに居住し、牧師のかたわら歴史・地誌関係の著書を多数著しているが、日本への渡航経験はなく、宣教師の報告書、オランダ東インド会社派遣の特使や商館長の見聞記等を参考に本書を執筆している。誤解も少なくはないが、情報量の極めて少なかった日本に関する書籍として珍重され、英訳のほか独語・仏語にも訳され、ヨーロッパ人の対日観に影響を残した。なお邦訳には大正十四年和田萬吉が英語版から抄訳した『モンタヌス日本誌』がある。

七　万国海律全書　　二冊

蘭文書名は"Internationale Regels en Diplomatie der Zee"(海の国際法規と外交)。本書はフランス国際法学者オルトランの著で、戦時・平時の海上国際法規等を実例を挙げて具体的に解説したもの。単に『海律全書』とも称される。展示本は、オランダに留学した榎本武揚(一八三六―一九〇八)が教えを受けたハーグ大学教授フレデリクスが、武揚の帰国に際して原書(一八六四年刊)を自ら蘭訳し、献辞を添えて贈った手書本である。武揚は本書を愛読し、例えば戊辰戦争の最中の明治二年三月二十五日、宮古湾海戦で本書中に見える旗章変更の法規を用い、自軍の軍艦回天を米国旗で偽装して官軍の甲鉄艦に接近させ、攻撃直前に日章旗に代え奇襲を仕掛けるという戦術をとっている。箱館戦争が終局を迎えた同年五月十四日に官軍の降伏勧告を拒絶した武揚は、本邦無二の本書を戦火で失うのを惜しみ、巻頭に「Geschenk aan de Admiraal van de Keizerlijk Japansche marine van Enomotto Kamadiro」(榎本釜次郎より皇国日本海軍提督へ贈物)との献辞を記して官軍に寄贈した。官軍は十六日その答礼として酒五樽を贈っており、箱館戦争下の美談として語り継がれている。

本書は扉に「海軍蔵書」印が捺されていることから判明するように、一時海軍省の所有に帰した。後に榎本は海

軍卿在任中に同省の書庫で本書を発見し、再び自家の蔵書としたが、大正十五年に孫武英がこれを宮内省に献納した。なお、オルトランの原書は明治二十二年、海軍参謀本部編纂課により『海上国際条規』と題して邦訳された。

八　満文輯韻　一九冊　四〇一―八二

高橋景保（作左衛門、一七八五―一八二九）が編纂したわが国最初の満州語辞典。首巻と本文二十六巻から成る。文化五年（一八〇八）、景保は同元年来航したレザノフが幕府に提出した満州語の国書を翻訳するよう命じられた。彼はこれを同七年に幕府に上呈したが、幕府から貸与されて翻訳に利用した清国勅撰の満漢辞典『増訂清文鑑』の不備から満和辞典の必要性を認識するに至り、本書の編纂に着手した。同十年火災で原稿が焼失したが、同十三年成稿、文政三年（一八二〇）幕府に上呈された。本書はその原本で、主に『増訂清文鑑』と清の舞格が撰した満州語の入門書『清文啓蒙』に基づいて満州語を韻順に排列し、訳語または短い説明句を加えている。満州語は縦書きで右へと進むため、左綴じに装丁してある。

付録として加えられている『満文散語解』二巻（二冊）は、『満文輯韻』成立後五カ月間に作られた続編である。これも主に『清文啓蒙』に依拠しているが、漢文訳の脇に小さく片仮名で日本語訳を付したり、満州語に対応するオランダ語を適宜示している点に特徴がある。なお、当部には『満文輯韻』の増訂版『増訂満文輯韻』十三巻（文政十―十一年）も蔵する。以上三書はいずれも内閣文庫の所蔵であったが、明治二十四年に宮内省に移管された。

高橋景保は幕臣、蘭学者。天文方に出仕し、蛮書和解御用の創設につとめたが、地理学にも通じ、伊能忠敬の全国測量事業を監督し、忠敬の死後、その地図の完成に尽力した。また各種洋書の訳出と校訂などにも功があったが、文政十一年シーボルト事件に座して投獄され、翌年獄死した。

九　蘭語抄録　三冊　四一五―二八

幕臣川路聖謨（左衛門尉、一八〇一—一八六八）のオランダ語学習ノート。聖謨は豊後国日田の産。四歳の時に江戸に出、十八歳幕府勘定所の吏員に採用されたのを皮切りに持ち前の努力と忍耐により栄進を重ね、普請奉行・奈良奉行・勘定奉行等の要職を歴任し、能吏と称された。生来学問を好み、その旺盛な知識欲は和漢に止まらず洋学にも及んだ。しかも外警頻繁となり、自らも勘定奉行・海防掛として外交問題に深く関わり、露国との会商等を経験（後出の『長崎日記』『下田日記』参照）したのを機に、聖謨はますます西洋の文物に関心と理解を示すようになり、蕃書調所・種痘所等の創設に尽力する一方、『海国図誌』（米国人ブリッジマン原著、清国人魏源編集の世界地理書）の自費出版などを行った。そして安政五年（一八五八）五月大老井伊直弼に睨まれて失脚すると、激務から解放された余暇を利用して、五十八歳の聖謨は積年の夢だったオランダ語の勉強を開始するのだが、その際のいわば学習ノートが本書である。当部には三冊を蔵し、そのうちの一冊は師のオランダ通詞森山憲直（多吉郎）が「レイスブック草訳」（レイスブックとはオランダ語 leesboek のことで、読本の意）について口授したところを聖謨が市販の罫紙に筆記したもの。すなわちテキストのオランダ語文を筆記体で綴り、その単語の一つひとつに語釈や文法上の説明、読み方、和訳する際の順番を記し、欄外に補注を付するなど、全般にわたり入門者のオランダ語学習に必要な注釈がこと細かに施されている。あとの二冊は頭字「ハ ha」から「ワ wa」にいたる蘭日単語帳一冊と、気象・人体・物品等の語意別に纏められた日蘭単語帳一冊である。いずれも聖謨の自筆にかかり、幕府高官によるオランダ語学習の実態と聖謨の努力の跡が窺われる史料として珍重に値する。因みに聖謨は明治元年三月、幕府の瓦解に殉じて拳銃自殺した。

〔二〕　新訂万国全図　　　　一鋪　　　　四五九—一〇二

わが国の代表的な蘭学系世界地図。鷹司家旧蔵本。異国船の来航に伴う外交政策立案の基礎的な資料として正確

な世界地図を必要とした幕府は、文化四年（一八〇七）十二月、新たな世界地図の調進を天文方高橋景保に命じた。景保は民間天文学者間重富とオランダ通詞馬場佐十郎の協力を得て、英国製の海図『アロウスミス図』や『十六省九辺図』などを参考にして製作に着手し、同七年手書図を完成させ、幕府に上呈した。展示した地図はその後景保の監修・校訂の下、その手書図をもとに銅版画家亜欧堂田善（永田善吉）が銅板に刻したもので、文化十三年春頃に刊行されたものと思われる。西洋でいう西半球を右側に置いて「東半球」と改称することによって、ヨーロッパの地図では左端に位置する日本を中央に置き、経度数値を省いて本初子午線を不明確にし、左上に京都中心半球図を掲げている。また『康熙内府図』（『皇輿全覧図』）や、間宮林蔵が文化八年幕府に上呈した第二回樺太探検報告『北夷分界余話』等に基づいて東アジア一帯を改訂、特に当時二島あるとされていた樺太を一島として描き、さらに地名を加筆・訂正するなど、日本の独自性を示すとともに、わが国の作であることを表そうとしている。本図は後に改訂増補されて『重訂万国全図』として官刻され、また各種の私撰の世界地図にも影響を与えた。

二　徳川斉昭鷹司大相国宛地球儀其他進献物消息　一通　鷹―七三八

前水戸藩主徳川斉昭（一八〇〇―一八六〇）は嘉永五年（一八五二）六月、関白鷹司政通を介し、上表して地球儀を朝廷に献上した。本書状は同年八月二十二日付で斉昭より政通に送られた仲介に対する礼状である。斉昭は水戸家第八代藩主治紀の第三子。文政十二年（一八二九）兄斉脩卒去の後を承けて第十代藩主となった。姉の清子が政通の夫人であることなどから、政通に繁く書状を寄せている。斉昭は尊王の志篤く、憂国の念が強かったので、積極的に藩政を改革し、またしばしば幕府へ建言を行った。しかし却ってそのことが政道に触れるとして、弘化元年（一八四四）五月幕府より謹慎を命ぜられ、家督を嗣子慶篤に譲り、駒込の藩邸に蟄居した。その間に斉昭は、当時の対外政策を省み、天皇が世界の全容を洞観して皇威を四表に発揚されんことを願い、地球儀を製作して朝廷に献上した。製作を命じられたのは家臣の鱸重時（半兵衛）である。重時は蘭学者であり、また地理学・造船術に

も通じていた。献上された地球儀は直径三尺六寸二分、紙張りで、一面に描かれた世界図は色分けされ、周囲には木製の框が附けられ、黒漆塗の雲脚台に乗せられている。孝明天皇が甚だこれを嘉賞された旨が本書状より知られる。この地球儀は明治元年八月二十七日、京都御所における明治天皇の即位式の際に新方式の一つとして式場に設置され、現在は宮内庁侍従職に保管されている。

三　喎蘭紀事（おらんだきじ）　一冊　五〇六―一二八

本書は、十七世紀のオランダの海外進出をめぐり、台湾で生じた浜田弥兵衛（やひょうえ）事件の記録「浜田捕加比丹」と、国姓爺（鄭成功）の台湾攻略に関する「国姓爺取塔伽沙古」から成る写本。「天爵堂図書記」「君美」の朱印が見え、新井白石旧蔵本の一書である。本文は白石の自筆ではないが、「浜田捕加比丹」に見える朱筆の傍注と末尾の注記は、本文中の誤りを考証訂正した白石の自筆である。末尾の注記には「丙申九月廿八日君美識」と見え、白石が享保元年（一七一六）五月に致仕した後に記したものとわかる。白石は周知の通り西洋の地理・歴史等に博大な知識を有しており、本書は致仕以後に進められたオランダ研究の一端が窺え注目される。

弥兵衛の一件は、オランダが支配する台湾南部のタイオワン（現、安平）で日本の貿易を押さえようとしたことによる両国間の確執が発端となって、寛永五年（一六二八）にタイオワン長官ピーテル・ヌイッと末次平蔵所有の朱印船の船長浜田弥兵衛らが起こした事件。ヌイッの迫害を受けた弥兵衛らがヌイッの子供らを人質に取るなど、種々の波乱があり、この事件のため同九年まで平戸オランダ商館は閉鎖され、日蘭貿易は一時中断した。しかし事件の解決により日蘭貿易は再開され、幕府の鎖国政策の下で、オランダが通商の国として対日貿易を継続・発展させていったことは周知の通りである。一方の国姓爺の台湾攻略は、明清交代期の寛文元年（一六六一）に、「抗清復明」を標榜する国姓爺の進攻によってオランダ人がこの地を失った顛末等が記されている。

一三　天馬異聞　　一冊　　二〇三—二七四

本書は、江戸初期に来日した平戸オランダ商館長クーケバッケルの日記のうち、島原の乱（一六三七—三八）に関する記事を、文化年間（一八〇四—一七）長崎に在任したオランダ商館長ヅーフが抄写し、これをオランダ通詞吉雄如淵（権之助、一七八五—一八三一）が邦訳したもの。書名の「天馬」とは、乱の発生場所である天草・有馬の略称か。本書は別に『天草騒乱一件』とも称され流布するが、展示本は末尾に幕臣で書物奉行を勤めた鈴木白藤（恭）の識語を有し、それによると文政十年（一八二七）の書写であることが判明し、各地で所蔵する写本のうち最も書写年代の古いものである。原著者クーケバッケルは、寛永十年（一六三三）より六年間にわたり商館長として平戸に在任、島原の乱では対日貿易を維持するため幕府の要請に応えて原城砲撃を自ら指揮し、幕府高官・長崎諸役人の信頼を獲得した。本書には、島原の乱の経過が具体的に記されているのみならず、当時の日本・オランダ双方の対外政策の基調が窺える記事も存して興味深い。乱後、ポルトガルが日本から追放されたことで鎖国体制はほぼ完成するが、乱の鎮圧におけるオランダの積極的な協力は、同国が鎖国以後も来航を許される一要因となった。

訳者吉雄如淵は蛮学世話掛・江戸番通詞などを勤め、『ヅーフ・ハルマ』の校訂謄写に力を尽くし、シーボルトとも親交があった人物。また展示本は当部が所蔵する古賀家旧蔵本の中の一書であるが、古賀本は儒官として著名な古賀精里・侗庵・茶溪三代の著書並びに蔵書一万四千八百余冊から成り、茶溪没後の明治二十二年、一括して宮内省に献納された。なお、国会図書館本を底本とした翻刻が『文明源流叢書』一に収められている。

一四　琉球国郷村帳及附図　　三冊三幅　　一六五一—一八二

江戸幕府は中央集権的な国家支配の立場から、国毎に石高を集計した土地の台帳である郷村帳と、国単位の地図である国絵図を全国規模で作成した。その作成方法は諸国の大名に一定の基準を示して下書きの調進を命じ、各大

名から提出された下書き（国絵図の場合は伺絵図という）に基づいて各清書本を作り、幕府文庫と勘定所に各一部ずつ保管した。この郷村帳・国絵図の作成は江戸時代を通じて慶長・正保・元禄・天保の四度ほど行われ、このうち元禄度のそれは元禄十年（一六九七）閏二月に調進の幕命が出され、同十五年中に製作が終了した。この時、琉球国については鹿児島藩が日向・大隅・薩摩の三カ国と共に担当調進したのだが、本書は郷村帳・附図共に幕府の作成基準に準拠し、かつ「元禄十五年壬申八月　松平薩摩守」との年紀並びに署名を有するため、元禄度に鹿児島藩が調進した郷村帳で、附図は国絵図であることが判明する。

このうち郷村帳は三冊から成り、展示本はそのうち沖縄島・計羅摩島（現、慶良間島）等の一冊。各島毎に間切（村）単位で石高が記入され、巻末に総計を記載する形式は幕府が示した作成基準に従っており、本帳は下書きと思われるが、内閣文庫所蔵の郷村帳の清書本が琉球国を欠くため貴重である。

一方の附図、すなわち国絵図は三幅から成り、掲出図は前出の郷村帳と対になる沖縄島・計羅摩島等の一幅。島毎に色分けし、楕円形の枠内に間切名を記入するほか、一隅に囲みを設けて色分けの凡例を記し、各間切の石高・間切数とその総計とを記載する形式は作成基準の通り。本図の清書絵図は内閣文庫に所蔵されているが、彩色の丁寧さなどから判断して、鹿児島藩が幕府に提出した伺絵図の可能性も考えられる。

一五　蝦夷風俗絵巻物　二巻　B六—一一

蝦夷地等の風俗に関する図説を集録した絵巻。旧御歌所本であるが、本書成立の動機や筆者については未詳である。上巻は蝦夷地の探検家村上島之允（一七六〇—一八〇八）の主著である『蝦夷島奇観』（寛政十二年〈一八〇〇〉序）から、アイヌの婚礼・酒宴等の儀礼、家屋、イナウ（木幣）・装身具・狩猟具等の器物のほか、貴重な交易品であった得撫島のラッコ等を抄写したもの。下巻の前半は大黒屋光太夫のロシア漂流の事情聴取を基に幕府奥医師桂川甫周（ほしゅう）（国瑞、一七五一—一八〇九）が著した『北槎聞略』（寛政六年成立）の附図から、ロシアの手

巾・頭巾・靴・手袋等を抄写したもの。後半は島之允が撰し、その養子貞助と、島之允の弟子間宮林蔵が増補した『蝦夷生計図説』(文政六年〈一八二三〉成立)から、アイヌの舟の製作過程やその関連の祭祀などを抄写したもの。模写の対象になった三書は、いずれも近世の北方関係史料を代表する文献であり、本書はこれらの元本と比較して細部に若干の差異が窺えるものの、細緻な観察に基づいて描かれた元本の画技・描写を遜色なく伝える貴重な精写本である。

一六　韃靼漂流記　一冊　五〇六―一一二

寛永二十一年(一六四四)四月、越前国三国浦新保村の竹内藤右衛門・同藤蔵らの船三艘が松前へ商いのため出航したが、海上で大風にあい朝鮮国境に近い清国の也春屯(現、ロシアのポシエート付近)に漂着、五十八人のうち十五人が生き残った。時あたかも明が北京から追われ、かわって清が北京に遷都した直後であったため、漂流民たちは厚遇をうけ、旧都盛京(瀋陽)から新都北京へ送られたのち、李氏朝鮮の都漢城を経由して、正保三年(一六四六)正月に釜山倭館に引き渡された。帰国した十五人のうち国田兵右衛門・宇野与三郎の両名が江戸に召し出され、将軍家光の御側役中根正盛宅において尋問のうえ、同年八月に口述書が作成されたが、これが『異国物語』『韃靼物語』などと題されて流布した。草創期の清朝の風俗・法制・言語を伝え、漂流民の送還法を窺わせる貴重な史料である。本書にみられるように、日本では中国東北部や沿海州を韃靼と称したが、明清代の中国において韃靼とは蒙古を意味するので、日本側の呼称は必ずしも適当ではない。

展示本は新井白石の書写本で、外題は「越前三国浦記」。本書では漂流年次を「寛永廿三年」とするが、白石は欄外に朱書して「廿一年」に訂正する。欄外朱書にはこのほか「是歳五月大清定鼎于北京」「慈仁」「正直」「恭謙」などとあり、白石が清朝初期の統治や民情に関心を寄せていたことがわかる。本書の書写年は不明であるが、白石は享保七年(一七二二)の安積澹泊(たんぱく)宛ての書翰でこの漂流事件に言及している。

一七　窮髪紀譚　一冊　二〇五—八一

幕府の儒者古賀侗庵（一七八八—一八四七）が樺太探検で著名な間宮林蔵（一七七五—一八四四）から直接聞いた談話を、門下生に筆録させたもの。古賀家旧蔵本。文政九年（一八二六）成立。標題の「窮髪」は、『荘子』逍遙遊の中の「窮髪之北」からとったもので、極北不毛の地を意味する。内容は林蔵口述の『東韃地方紀行』と同様、文化六年（一八〇九）に彼が探検した樺太・東韃靼（現、ロシア沿海州）の風俗・生活習慣及び黒龍江下流にある清国の仮府デレンでの清国官吏との遣り取り、交易の模様などを箇条書したものである。『東韃地方紀行』には見えない記述が多いので、両書を照合することによって、林蔵の大陸踏査の意図や詳細な観察を読み取ることができる。写本は少なくはないが、古賀家に伝来した本書を原本とする説もあり、これを底本とした翻刻が東洋文庫の『東韃地方紀行他』に収められている。

なお、古賀侗庵は儒者古賀精里の第三子。文化六年、幕府の儒官に抜擢され、昌平坂学問所の教授となる。侗庵は北方問題に関心が強く、ロシア関係の書物を蒐集して『俄羅斯紀聞』四巻四十冊を編纂している。

一八　環海異聞　九冊　一六八—六二七

江戸時代のロシア漂流記。寛政五年（一七九三）陸奥国石巻から江戸に向かった米沢屋平之丞の持船若宮丸は塩屋崎付近で暴風雨により遭難、乗組員の津太夫等十六名はロシア領オンデレーツケ島（現、アリューシャン列島アンドレヤノフスキー諸島の一島）に漂着し、イルクーツクに八カ年滞在した。その後王命により、病気の者を除く津太夫以下十名は首府ペテルブルグに赴き、帰国希望の津太夫等四名が国王に謁見、市内見物などをし、享和三年（一八〇三）六月使節レザノフと共にカナスダ港（現、クロンシュタット港）を出帆、西廻りで世界を一周し、文化元年

（一八〇四）九月に長崎に着いた。折しもラックスマンの根室来航等により北辺に関心が高かった時期でもあり、仙台藩主伊達周宗は同藩蘭方医大槻玄沢・同藩儒者志村弘強の二人に命じ、文化二年十二月より江戸藩邸で津太夫等から事情を聴取させた。それをもとに玄沢は自らの該博な知識を駆使し整理考証して本書を著し、同四年五月に藩主に上呈した。

展示本は首巻と本文十五巻から成り、彩色を施した詳細な図が適宜配されている。首巻は書名の由来、漂流の経過などを概観して、本文は主にイルクーツクでの見聞を基にしたロシアの制度・風俗・自然・医学・言語などを多岐にわたり記載し、さらに周航した世界の各寄港地及び周辺の地誌についても記されている。

原本の所在は不明であるが、写本は多く、当部にも三部所蔵している。その中でも、展示本は小柴直裕（研斎）が表御番医師坂立節所蔵の文化七年筆写本を文政十二年（一八二九）に借写したもので、筆写の時期が早く、伝写の経緯が明らかな一本である。刊本は、展示本を底本とした『海外渡航記叢書』二をはじめ、『北門叢書』四、『環海異聞　本文と研究』などがある。

一九　亜墨新話　二冊　二〇五—一一

天保十二年（一八四一）十月摂津国兵庫の中村屋伊兵衛の持船栄寿丸は、船頭善助以下十三人と積荷を乗せて奥州南部に向かう途中、下総国犬吠崎沖で烈風のため遭難。太平洋漂流中の翌年二月、善助らはイスパニア船に救助され、メキシコに渡った。善助らは二つのグループに別れたが、サン・ホセに連行された者達のうち、船頭善助と阿波国の水手初太郎は、逸早くメキシコのマサトランを経て再度太平洋を渡り、澳門・乍浦経由で、天保十四年十二月長崎に送還された。本書は、弘化元年（一八四四）前徳島藩主蜂須賀斉昌の命により、初太郎に対する事情聴取を基にして、同藩儒員前川文蔵が整理・作成した漂流記で、『天保年間阿波国水手初太郎等漂流一件』等の別名もあり、また写本も多く流布している。展示本は、古賀家旧蔵の一書で江戸末の写本。彩色された美しい衣服や地

図の挿絵なども織り交ぜながら、漂流経緯のほかメキシコの地形・気候・人物・言語・風俗などを紹介しており、当時としては刮目すべき情報を伝えている。その後本書は安政元年（一八五四）、文蔵の自序等を削って『海外異聞　一名亜墨利加新話』として板行された。なおこの時の漂流者の漂流記として、本書のほかに『東航紀聞』（善助・弥市）、『海外異話』（亥之助）、『墨是可新話』（太吉）等がある。

三〇　海国兵談　　五冊　五〇三―一二七

林子平（一七三八―一七九三）の著した兵学書。全十六巻。天明六年（一七八六）脱稿し、寛政三年（一七九一）に板行された。子平は幕臣岡村源五兵衛良通の次男として江戸に生まれたが、兄が仙台藩士に取り立てられた後、仙台に移った。学問を好み、江戸・長崎に遊学して新知識の吸収に努める一方、藩に対して藩政改革の意見書なども提出した。時あたかもロシアなどの西洋諸国が日本の開国を求めはじめ、子平もわが国を取り巻く状況を踏まえ、海防政策に言及するようになる。まず天明六年に『三国通覧図説』を板行して、朝鮮・琉球・蝦夷の地理・風俗を明らかにすると共に、ロシアの南下に対抗する防備の必要性を説いた。ついで子平の兵学思想の神髄を明らかにしているとされる本書を板行し、「海国」たるわが国の国防体制の要諦を説き、中でも幕府の長崎を中心とする海防政策を鋭く批判し、江戸湾への外国船侵入について逸早く警鐘を鳴らして江戸湾防備の急務を力説した。しかし子平のこうした言動は幕府の忌諱に触れることとなり、寛政三年十二月幕府に召喚され、国許で蟄居の上、本書の絶版及び板木没収の処罰をうけ、不遇のうちに病死した。本書は発禁処分後も密かに写本で流布したが、天保十二年（一八四一）その罪が許され発禁も解かれると、嘉永四年（一八五一）に『精校海国兵談』と題して板行された。展示本は、処罰を受けた後、子平自身が子孫の参考として書き遺した自筆本とされるもので、明治九年明治天皇の東北御巡幸の際に天覧に供され、ついで同十七年皇室に献上された。

二　新　論　　　　　　　　　　　　　　　　二冊　　四五四－九

本書は会沢正志斎（安・恒蔵、一七八二－一八六三）の主著で、後期水戸学における尊王攘夷思想を体系化したものである。正志斎は水戸の学者で藤田幽谷の弟子、彰考館総裁・弘道館教授頭取などの職を歴任した。夙に北辺の海防問題に危機感を抱いていたが、文政七年（一八二四）五月、水戸藩領大津浜に上陸したイギリス人を藩命により尋問したことが大きな衝撃となって対外危機意識を深め、それが執筆の動機となって、翌文政八年三月に『新論』を脱稿した。国体（上・中・下）・形勢・虜情・守禦・長計から成り、わが国が天祖により忠孝の道徳を理念として建国された事情、西洋列強が日本に対して抱く野望の危険性を説き、それに対する防衛手段として富国強兵策を述べると共に、わが国が永続するためには一定不易の長策が必要であることをも説いている。

本書はもともと水戸藩主徳川斉脩に上呈する目的で著されたものであり、斉脩より「忌諱の儀も有ㇾ之」との理由で公刊は許されず、また内々に流伝する場合も「姓名を自ら著し不ㇾ申様」との注意を受けたが、無署名の筆写本・木活字本が広く伝わり、正志斎の名声の高まりと共に、尊王攘夷運動に大きな影響を与えた。会沢正志斎の名で最初に公刊されたのは、脱稿より約三十年後の安政四年（一八五七）のことである。

本書は正志斎の自筆の稿本である。正志斎の門人であり、また縁戚でもあった旧水戸藩士寺門謹が所蔵していたもので、明治二十三年、明治天皇が水戸に行幸された際、同人より献上された。

三　時勢論　　　　　　　　　　　　　　　　一巻　　F－一－五

嘉永六年（一八五三）六月、米国東インド艦隊司令長官ペリーが艦隊を率いて浦賀に来航した際、長州藩は幕府より大森の警備を命じられ、ついで相州沿岸の警備に配置された。前年より江戸に出府し斎藤彌九郎のもとで剣術を修業していた木戸孝允（一八三三－一八七七）は、藩命により警備に動員され、また他方では伊豆韮山代官江川

太郎左衛門に従って武蔵・伊豆・相模等の海岸測量を見、同人より洋式砲術を学ぶなどした。一方、孝允の師である吉田松陰（一八三〇—一八五九）も江戸に来遊中で、『将及私言』等の時務策を藩主毛利慶親に呈し、さらにこの頃長崎に来航した露艦に投じて密出国することを計画しており、翌安政元年には下田沖で米艦に投ぜんとして失敗し幕府に捕えられた。孝允は松陰のこの計画を知る一人であった。

本書はこのような情勢の中で嘉永六年に孝允が草し、松陰が加筆訂正したもので、いずれも自筆。当部所蔵『木戸家文書』に収められている。警備に任ずる長州藩の軍備の整備を目的として書かれたものではあるが、対外的な軍事危機のなかで、武備の充実のためには何よりも「士気」の作興が急務であることが強調されている。こうした危機意識が孝允・松陰らに共有されていたのであった。

孝允は松陰の添削を受けた本書を参考に、さらに意見書を起草し、同年十二月藩主に上呈した。本書と共にその意見書の草稿および清書本も併せて装丁されている。

三　真木保臣建白書　　一冊　　五〇〇—一五六

真木保臣（和泉、一八一三—一八六四）は、久留米藩の神官の家に生れた。会沢正志斎の尊王攘夷思想の影響を受け、久留米藩の藩政改革を企てて失敗し、約十年の蟄居の後、文久二年（一八六二）に脱藩し、長州藩を拠り所に倒幕運動に奔走したが、元治元年（一八六四）禁門の変に破れ、天王山頂にて自刃した。

本書は蟄居中の安政五年（一八五八）七月に前内大臣三条実万（さねつむ）に上書した建白書の原本で、「急務三箇条」と呼ばれるものである。条約勅許問題、将軍継嗣問題などで政局が揺れ、朝廷の政治的地位が高まったのを好機として、朝廷の政治的権威を恢復する最も緊要な方策を述べたもので、その内容は、前水戸藩主徳川斉昭を朝廷に召し出し、これによって天下の人心を朝廷に帰服させ人材を朝廷に集めること、朝廷の権威を高めるため名位を重んじ、軽々しく爵位を与えることは慎むこと、朝廷は常に仁義を標準として行動し、天下の人心を維持することを心掛け

るべきこととなっている。開国以来の幕府の外交を、外国の恐嚇に屈した姑息の計略と捉え、そうした中で朝廷の攘夷姿勢に対する期待が討幕・王政復古の思想へとつながっていく保臣の思想の流れを読み取ることができる。

これより先、弘化四年（一八四七）、保臣は孝明天皇の即位礼を野宮定功（きだいさ）の随身という資格で拝観し、その折に実万・東坊城聡長（ときなが）等の公卿と面識を持つことができた。保臣が実万にこのような建白書を送ったのは、こうした関係をたよりに、朝廷に意見を呈しようとする試みであった。

二四　家仁親王御日次記　　四冊　　三五三―一五八

桂宮の第七代家仁（やかひと）親王（一七〇三―一七六七）の自筆日記。親王は文筆に秀で、日記のほか和歌・随筆・紀行あるいは公事に関する抄録など多くの著作を残している。展示の箇所は、親王が享保四年（一七一九）九月十一日、折から入京した朝鮮通信使の一行を見物し、その行列を記した条である。江戸時代の朝鮮通信使は、幕府が、豊臣秀吉の出兵によって断たれた日朝間の国交の修復をはかり、交渉の結果、将軍交替時などに朝鮮から国書を携えた使節団が派遣されてきたものであり、来航は前後十二回に及んだ。鎖国下の当時、対馬をはじめ寄港・宿泊の地などで頻りに文化交流が行われ、沿道の人々は異国の風俗を見物のため蝟集した。享保四年（粛宗四十五年）の通信使は第九次に当たり、将軍徳川吉宗の襲職祝賀のため、正使洪致中・副使黄璿・従事官李明彦等四百七十五名にのぼる一行が、四月十一日漢城を発し、釜山より対馬を経て海路大坂に到り、それより御座船に分乗して淀川を溯り、淀から陸路江戸に向かった。親王や公家にとっても通信使の入京は多大の関心事であり、その都度行粧を見物に赴いた記録は少なくないが、本書のように行列に片仮名で朝鮮語の訓みを付し、あるいは図を描き、註釈を施した例は稀であり、未だ十七歳の親王の好奇心あふれる眼差しが窺われ興味深い。

参考に展示した『朝鮮人絵』は、文化八年（純祖十一年、一八一一）の聘礼の際、上使をつとめた小倉藩主小笠

原忠固（ただかた）の家臣猪飼正穀が、正使以下の服装や旗・轎輿などを観察したままに描いたものの模写本で、幕末の有職家松岡辰方（ときかた）の旧蔵本である。因みに、この時の聘礼は対馬で行われ、これが最後の通信使となった。

二五　長崎日記　　一冊　　四一五—六五

幕府勘定奉行川路聖謨が露国使節プチャーチンの応接のため長崎に赴いた際の自筆日記。聖謨は大変筆まめな人で、遠国に赴いた際など日記を書いて江戸の留守宅に送り通信に代える習慣があり、本書もその一つ。プチャーチンが長崎に来航したのは、米国使節ペリーが浦賀を退去した翌月の嘉永六年（一八五三）七月のこと。その応接掛を命じられた聖謨は十月三十日江戸を発足、中山道・山陽道等を経て、十二月八日長崎に到着し、爾後プチャーチンと開国並びに北方領土劃定問題等を協議し、翌安政元年（一八五四）二月帰府した。本書はその間の約四カ月に及ぶ旅中の日記で、その性質上、外交折衝の機密にわたる記述はあまり期待できないが、外交の裏話や道中の見聞などが独特の軽妙な筆致で綴られており興味が尽きない。聖謨がこの日露交渉に当たっては、我よりは敢えて意思を表明せず、相手が穏やかに退去するのを待つという、いわゆる「ぶらかし策」で使命をまっとうし、ただ他国と条約を締結した際の優先締結を約束したのみで退去せしめた外交手腕は、夙に評価されているところである。

二六　下田日記　　一冊　　四一五—五七

川路聖謨の長崎に続く下田での日露交渉日記で、同じく江戸の留守宅に逓送されたもの。露国使節プチャーチンが日米間の和親条約の締結を知り、日露条約締結のため下田に再航したのは安政元年（一八五四）十月のこと。再度応接掛を命じられた聖謨は、十八日江戸を発足、二十一日下田に到った。十一月三日第一回の交渉がもたれたの

も束の間、翌四日突如大地震と大津波に襲われ、下田の町は壊滅状態に陥り、交渉が中断した。しかも露艦ディアナ号が大破し、修理のため戸田港へ曳航中に沈没するという事態が起り、聖謨は当然ながら下田の復興、露艦乗組員の収容・手当、代替露船の新造といった、相次ぐ難問題に忙殺された。こうした状況下、聖謨は交渉を再開し、十二月二十一日遂に日露和親条約を締結し、北方領土問題についても「ヱトロフ全島日本へ属し、カラフト者魯西亜と境を分つことをなさす、仕来之通たるへし」と約定された。本書はその辺の経緯はもとより、安政二年正月に一旦帰府した聖謨が、これに引き続いて二月・三月の両度、日露条約第六条の領事館駐留の撤回交渉のため下田に赴いた時を含め、都合三回に及ぶ下田行が長崎同様に筆録されており、日露交渉に尽瘁した全権自身の記録として『長崎日記』共々貴重な史料である。

二七　黒船来航ニ付鷹司家へ密報書　一巻　鷹―六二八

嘉永五年（一八五二）六月にオランダ商館長ドンケル・クルチウスが幕府に提出した「阿蘭陀別段風説書」には、米国東インド艦隊司令長官ペリーの率いる艦隊が明年日本に来航し、武力に訴えても開国を要求するという予告情報が記されていた。これを受領した幕閣は評議の結果ペリー来航の可能性を否定し、特に対応策を構じなかったが、万が一を心配した老中阿部正弘のほか、薩摩・福岡・越前・水戸等の有志大名はこれを憂慮していた。本書はこうした情況の下、嘉永六年のペリー来航前に、前水戸藩主徳川斉昭が自ら認めて関白鷹司政通へ送った「密報書」である。米国の開国要求の内容、艦隊の編成と所在、指揮官名、来航時期の予測等が記載された予告情報全文の写しと、幕府内部や有志大名等の情勢を書き添えた書状から成る。文中、斉昭自身「昼夜薄氷の思ひ」と心情を吐露しているのが印象的であるが、また斉昭の密報により関白がペリーの来航を予め知っていたことを示す史料として興味深い。このような時局や海外に関する情報が斉昭から政通の許にもたらされていたのは、政通が斉昭の実姉清子を正室に迎えているという両家の姻戚関係によるものであろう。

二八　兵庫開港一件ニ付徳川慶喜建言等書留　一巻　C八―一二三

本史料は、幕末の兵庫開港問題に関する書翰の写し七通を収めたもの。鷹司家旧蔵本。展示したのは三月五日付将軍徳川慶喜の上書と八月六日付島津久光（薩摩藩主茂久の実父）・前宇和島藩主伊達宗城（むねなり）連署の伺書（八月四日付御沙汰書を付す）の二点。慶応元年（一八六五）十月、いわゆる安政の通商条約の勅許は得られたものの、慶応三年十二月七日（一八六八年一月一日）に延期された兵庫開港は依然承認されなかった。開港には準備上六カ月以前の布告が必要であり、また英仏両国公使の要求もあり、慶喜は慶応三年二月以降早急な勅許の必要に迫られた。同年三月五日付の慶喜の朝廷への上書は、開港の勅許を奏請したもので、条約の守否は国の存亡に関すると述べている。彼は二十二日にも再度勅許を請うたが、結局許しを得られないまま英仏蘭米四カ国の代表に期日通りの開港を約束する。他方こうした慶喜の行動を牽制するため、久光・宗城・前越前藩主松平慶永・前土佐藩主山内豊信の四侯は、慶喜と長州処分・兵庫開港の二問題を話し合うが、会見は実質上慶喜に有利な妥協案の成立で結着し、その好機に乗じて五月二十三日に朝議を開かせた慶喜は、きわめて強引な態度で兵庫開港の勅許を得ることに成功する。しかし先に幕府に建議した所と異なるとする四侯は、連名で二十六日付伺書を朝廷に捧呈し、幕府の態度を難詰する。それに対して朝廷は八月四日、委細は幕府に尋ねるようにとの御沙汰書を下すが、久光・宗城は同月六日、さらに連署の伺書を捧呈し、その御沙汰書のいわれなきことを論じている。この伺書は最終的には却下され、兵庫開港問題は、結局慶喜の政治的勝利のうちに解決する。しかしそれは、武力倒幕を軸とする薩長の提携をさらに強めるものとなったのである。

二九　岩倉具視書翰　一通　F一―五

明治四年九月十二日付参議木戸孝允宛ての外務卿岩倉具視自筆書翰。『木戸家文書』に収める。明治四年七月の廃藩置県後、政府は安政の通商条約締盟各国へ聘問の礼を修め、条約改正の予備交渉を行い、併せて諸外国の制度・文物を調査することを目的とする遣外使節の派遣を決定する。八月中旬に政府上層部で検討が始まり、九月上旬には岩倉を使節とすることが内定した。岩倉は、木戸と大蔵卿大久保利通の同行を望んだが、太政大臣三条実美らは、両人の洋行は政務遂行に支障を来すと強く反対した。本書翰はこうした状況下で出されたものである。

書翰の中で岩倉は、政府高官の海外視察の必要性を述べたフルベッキ建言及び条約改正延期申入れについての正院から外務省への下問文書を一読し、木戸・大久保同行の念が再発したと述べ、両人の同行は交渉上必要であり、また諸外国に政府の安定を示し、帰朝後の改革にも有益であると説得している。こうした岩倉の強い希望もあり、九月二十七日木戸・大久保の参加が漸く内定した。

なお本書翰を収める『木戸家文書』人の部は刊本がなく、『松菊木戸公伝』に一部引用が見られるにすぎないが、本書翰も同書に部分的に引用されている。

三〇　特命使節并ニ一行官員ヲ送ルノ辞　　一巻　B七―一一四

明治四年十月八日遣外使節団の大使・副使が任命され、十一月四日神祇省で遣外国使祭が行われた。式後使節団一行は参内、激励と道中の自重を内容とする勅語を賜り、ついで六日太政大臣三条実美邸で送別の宴が催された。本文書はその際の三条の送別の辞で、その原本である。「外交内治前途ノ大業、其成其否実ニ此挙ニ在リ」と使節団の使命を述べ、「行ケヤ海ニ火輪ヲ転シ、陸ニ汽車ヲ輾（めぐ）ラシ（中略）無恙（つつがなき）帰朝ヲ祈ル」と格調高く結んでいる。岩倉使節団への期待が窺われる文書である。十二日使節団一行約五十名は横浜を出港、太平洋を越え、欧米へと旅立った。

本文書の参考史料として『明治四年欧米各国巡回岩倉具視携帯手帳写』を掲げた。本史料は伏見宮本で、一頁目に「山本復一所蔵（中略）岩倉公欧米各国巡回ニ付史官ニ命シ取調手帳ニ写取ラレ携帯書ノ写」とあり、岩倉が日

本の歴史・国勢を相手国に説明するために準備したものと考えられる。項目には、国名・島名の由来、五畿八道の構成等地誌に関するもの、皇位、皇統、外国交際、政治の変革等歴史に関するもの、楽器、書蹟、『二十一代集』等文化に関するものがあり、それぞれに簡略な説明が付されている。

三 木戸孝允書翰　一通　F一―五

岩倉遣外使節団の副使として欧米歴訪中の木戸孝允が、京都府参事・鉄道寮御用掛槇村正直に宛てた明治六年三月九日付書翰。当部所蔵『木戸家文書』に収める。槇村は、同じ長州藩出身の木戸の眷顧の下、京都府政に当たっており、新文化の導入に積極的であった。彼は、木戸の出発にあたり、欧米の工業技術の調査を依頼しており、木戸は、本書翰以前にも米国ソルトレークよりその情勢を槇村に報じている。

使節団は、明治四年十一月日本を出発した後、米・英・仏・ベルギー・オランダの諸国を歴訪し、六年三月九日、独国ベルリンに到着した。使節団の本来の目的であった条約改正予備交渉では具体的な成果は得られなかったが、一行が欧米の進歩と国際政治の実体を目の辺りにしたことは、わが国の近代化の方向をさぐり、立憲政体を創出するという明治国家形成の課題を実現していく上で大きな意義があった。

本書翰が記されたのは、使節団がベルリンに到着したその日である。ドイツに到った木戸は、わが国の範とすべき国として新興国ドイツを見た。書中、日本の形ばかりの開化を批判し、ドイツが軽浮挙動を抑え沈深実着に帰せしめ、今日の文明、富強に至ったことを手本とし、わが国人民を誘導し漸進して真の開化に至らしめることの必要を説く一方、欧米の文明国の弊害をよく調査することが必要で、文明国の安易な模倣はかえってわが国の利益を損なうことが少なくないことにも注意を喚起している。こうしたドイツへの好印象は使節団に共有され、わが国の政体の形成に多大な影響を与えていくことになるのである。

三二　グラント氏奉答書　　二通　　明—二四二

本文書は、前米国大統領グラント（一八二二—一八八五）が明治天皇に奏上した自筆による明治十二年七月四日付奉答の書、並びに八月三十日付告別の書である。

グラントは大統領引退後、一八七七年五月世界周遊に出発し、清国訪問の後、一八七九年六月二十一日軍艦リッチモンド号で長崎へ入港、七月三日東京に入った。明治天皇は米国の独立記念日に当たる七月四日、グラント夫妻を宮中に招き、岩倉遣外使節団に対する米国側の歓待についての謝意と来日歓迎についての勅語を賜ったが、これに対してグラントは、国賓として歓迎を受けたことへの感謝を述べ、米国は日本の隣人であり、日本が将来に向けて邁進する時は好意と援助を惜しむものではないとの奉答を行った。また八月三十日の謁見の際には告別の挨拶を奏上し、日本在留の二ヵ月半の間に受けた政府や一般国民の歓迎に深甚の謝意を表し、滞在中に知った日本の実情、人民の暮らし向き、国民性、天然資源について述べ、日本の独立平和維持と国事を遂行して文明国の尊敬を受けることのできる時が訪れることを望み、日本が将来においてさらに繁栄することを祈ると結んでいる。

なお参考に展示した『グラント氏接伴記』は明治十二年九月外務省公信局が編集し、これを宮内省において筆写したもの。もと二分冊であったものを合本している。内容は同年六月二十一日の長崎入港から九月三日の離日までのグラントの滞日動静を記した日記であり、七月四日の記事にはグラントの奉答を石橋政方外務権大書記官が通訳奏上した内容が記されており、また横浜・東京の巡覧報告、日光（七月十七日より三十一日まで）・箱根（八月十二日より十九日まで）への遊行報告などが記されている。

三三　宮内省編修　明治天皇紀附図　　二巻　　五五八—一六四

二代五姓田芳柳（ごせだほうりゅう）（一八六四—一九四二）が描いた明治天皇御事蹟画の下絵及びその関連資料を成巻したもの。

宮内省では大正三年から臨時編修局（後に臨時帝室編修局と改称）を設けて『明治天皇紀』の編修を行ったが、その脱稿間際に明治天皇の御事蹟画を作ることを企図し、昭和六年、二代五姓田芳柳に制作を依嘱した。芳柳はかつて大正六年に明治神宮奉讃会から聖徳記念絵画館に飾る御事蹟画の構図と原案の作成を依嘱され、下図八十図を制作したことがあり、その実績を買われての依嘱であった。芳柳は絵画館の御事蹟画を考証した際にまとめた『聖徳記念絵画館画題考証図』をもとに制作に着手し、同『考証図』に伏見桃山陵の図を加え、昭和八年六月までに全八十一図を完成させた。この完成図は『絵図一帙』と題され、同年九月『明治天皇紀』本文二百六十巻と共に昭和天皇に奉呈された。その後芳柳の手元に残っていた下絵五十四点と、編修局総裁金子堅太郎の書翰や新聞記事などの関連資料を、芳柳がまとめて上下二巻に成巻したものがすなわち本附図である。下絵だけに、奉呈図と較べると、例えば「樺太国境画定」のように構図のまったく異なるものが認められる。

本附図の第一巻は嘉永五年（一八五二）の御降誕から明治十一年青山御所で開催された能舞台開の行幸まで計二十六図を、第二巻は同十二年の前米国大統領グラント来日から同四十五年伏見桃山陵まで計二十八図をそれぞれ収録している。今回展示したのは、第一巻の「第十一　各国公使召見」と、第二巻の「第四十六　条約改正会議」の二図である。前者は慶応四年（一八六八）二月三十日紫宸殿で行われた初の外国公使朝見の図で、図中の「蘭国公使」はオランダ代理公使フォン・ポルスブロック。このほか山階宮晃親王・三条実美・中山忠能・伊藤俊介など、侍立した人々の名が書き込まれ考証の跡が窺える。後者は明治十五年一月二十五日から七月二十七日までの間、のべ二十一回にわたり外務省内で開催された条約改正予議会のうち、四月五日に実施された九回目の会議の図。図中には日本政府副委員塩田三郎等の名が記されている。本附図は下図ながら、確かな考証に基づいて描かれているだけに、文字資料とは違って、当時の情景を彷彿とさせ興味深いものがある。